

児童文学にみる母娘関係とその変容

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
白川 愛子

娘が抱える、母に対する思いや感情は混沌としている。一緒に居たいのに、いられない。愛し合いたいのに、愛されない、愛したくない。言葉にならない混沌とした思いは誰に聞かれることもなく、娘の寂しさは募るばかりだ。母と娘の間には見えない呪縛があり、互いを嫌悪し、呪いながら、この言葉にならない感情は次の世代へと継承されていく。

一方で母も、孤立した状況での子育てを強いられている。男性中心主義下(パターンリズム)の制度化された「母性」に規定され、子どもに関するあらゆる出来事は母親の成果にもなるが、責任にもなる。しかし、こうした母と娘の関係性における課題(本論文では母娘間葛藤と仮称)は概念化されないまま、現在に至っている。

ではなぜ、母娘間葛藤は概念化されなかったのか。精神分析学者であり、言語学者でもあるリュス・イリガライは著書『ひとつではない女の性』(1977/1987)、女は言葉を持たず、常に男性の言葉を借りている状況下にあることを指摘した。

本論文は、母娘間葛藤が児童文学にどのように表現されているかを読み取ることを目的とする。文学はこうした、上記のような混沌とした感情を表現する技法として豊かに発展してきた。フィクションの世界を疑似体験することで、読者は登場人物に思いを馳せ、自分の経験を相対化し、表現できなかった感情を読み取る。その表現は母と娘にとってなにを意味するのか。

考察は児童文学、松谷みよ子「モモちゃんとアカネちゃんシリーズ」(1964-1992)、梨木香歩『裏庭』(1996)、『西の魔女が死んだ』(1994)を対象とした。児童文学には、子どもたちのための、未来に向けたメッセージが込められている。母と娘が登場する文学作品は多くあるが、葛藤や憎悪に近い感情について表現されていることが多い。児童文学に込められた未来へのメッセージを、母娘間葛藤における小さな展望としたい。

文学作品の考察の視点は「主人公の成長」、「視点人物」、「孤独感」、「母の苦悩」とした。父殺しに対する「母殺し」は男性中心的視点でしかないため、母と娘の関係の「克服」に名前は未だ存在しない。しかし、以上の4つの視点から、登場する母と娘の関係とその変容を考察することによって、母娘間葛藤を共有する手立てが得られるのではないか。母も娘も、互いに対する葛藤や嫌悪に孤立してはならない。共有する手立てとしての「詩的な表現」を、女性が獲得しようとしている言葉と考え、娘たちがそれを共有することが本論文の小さな展望である。